

人生には意味がある

マタイ 8:28-34

今日の説教の題は「人生には意味がある」です。真面目に人生を生きる人、あるいは真面目に自分の人生を考えている人であれば、「自分の人生に意味があるのでしょうか？」と考えたりしたことがあると思います。長年、ホスピスでチャプレン（病院付きの牧師）として関わってこられた先生がこんなことを言っておられました。「このホスピスに入る前にどんなに波乱万丈、ハチャメチャな人生を歩んできた人であってもここでは私に切実な問いかけをして来られます。例えば『今までの私の人生を振り返ってみて生きてきたことに意味があるのでしょうか？』『さんざん家族に迷惑をかけてきたけれどこんな自分が赦してもらえるのでしょうか？』と言ったことです。」もうすぐ自分の人生を終えようとする時に何が自分にとって大切なことか、考えて出てきた問いだと思います。このような問いかけで苦しんだり、悩んだりすることをスピリチュアルペイン「魂の痛み」と言います。聖書では生きる意味や目的を見失っている状態、人間として本来あるべき姿を失っているこのような状態を霊的に死んだ状態だと言っています。たとえ見かけは明るく、能力があり、良いことをしていたとしても生きる意味や目的を見失っているならばそれは霊的に死んだ状態であるのです。

さて今日は聖書の中でも暗い墓場に住む人が救われ罪赦されて本来の生き方に変えられてゆく箇所を取り上げたいと思います。2000年ほど前のことですがユダヤの国のすぐ隣にガダラという町がありました。ここは、かつてはユダヤの国だったのですが、イエスの時代には、もうユダヤの国ではなくなっていました。それは、この町で豚が飼われていたことから分かります。ユダヤでは豚は汚れた動物として決して飼われることはなかったからです。ガダラの町は、ユダヤの国のすぐそばにありながら、人々はまことの神を知りませんでした。そこでは悪霊たちが力をふるい、悪霊につかれた人々がその町の墓場に住んでいました。墓場に住みたいと願うような人はいないでしょうから恐らくこの人たちはここしか居場所が無かったかもしれません。あるいは悪霊が出てきますので強いてここに来させられたのかも知れません。この人たちは人の心を失い、他の人々と隔離され、何の目的もなく朝から晩まで墓場の中を歩き回るだけの生活をしていました。皆さんは、この人たちのことを考える時、恐ろしいと思いますか、それとも哀れに思いますか。あるいは、自分たちに関係のない物語だと思いませんか。私は、このガダラの変った人たちの姿の中に、現代の私たちの姿があるように思えてきました。もちろん、私たちはこの人たちのように奇妙な生活をしているわけではありません。けれども、普通の生活をしている人々も、この人たちと同じように、人の心を失いかけ、他の人と関わりを持たず、何の目的もなく人生を送っているように思えるのです。聖書の光に照らして見みると、ガダラの墓場に住んでいた人たちと、私たちの間にいくつかの共通点があることに気がつきます。

第一に、この人たちは墓場に住んでいました。墓場というのは、生きた人間の住むところではなく、死人の住み家です。「死人の住処に生きた人間がいる」—何か変だと思いませんか。これは、彼らが「生きながらにして死人」であったことを意味しています。肉体は生きていても、この人たちは社会的には死んだも同然で、他の人といっしょに生活できませんでした。さきほど言いましたように聖書は、生きる意味や目的を見失っている状態、人間として本来あるべき姿を失っている状態を霊的に死んだ状態だと言っています。たとえ、多くの知識があり、仕事をする能力があり、道徳的な行いができたとしても、霊的に死んでいる人は、神が私たちに与えてくださった本来の生き方をしていないのです。

第二に、墓場に住んでいた人たちは自分の力以上のものに支配されていました。彼らは自分の意志や理性でなく、悪霊の力に左右されていたのです。自分では、自由、気ままに生きているつもりでいたのですが、実は、悪霊に縛られていました。悪霊に考え方や行動が支配されていました。聖書によると、神から離れた人は、自分以上の霊的な力に縛られているというのです。薬物やギャンブル、アルコールなどにのめりこんでいる人、そういう人の状態を依存症と言いますが、彼らを見ると、その人たちが、その人

たち以上の力に支配されていることがよく分かります。つまり自分のことをコントロールできないということです。依存症の人は「止めようと思えばいつでも止められる」というのですが、実際は、そのものの働きにコントロールされていて、自分では止めることができないでいるのです。依存症という人だけのことだけではありません。誰でも何かに依存して、いつでも止められると思いつつ止められないでいる悪い癖や思考を持っています。ねたみや怒り、思いわずらいや自己憐憫といったものも私たちがその中に束縛して逃れられないようにします。それは、そうしたものの背後に霊的な力があるからです。そのため、自分でコントロールできるはずの自分をコントロールできなくしてしまっているのです。

第三に、このガラダの墓場に住む人たちは、他の人に危害を加え、また、自分で自分を傷つけていました。同じ場面が書かれている別の聖書では石で自分を傷つけていたと書かれています。罪は、それがどんなに魅力的に見えても、最後には人を傷つけ、自分を傷つけてしまうものです。それが罪の本質です。例えば薬物は一時的に快楽を与えても、やがて肉体を蝕み、頭脳にダメージを与え、人格と生活を狂わせて、回りの人まで苦しめます。「あなたも億万長者になれる」と、ギャンブルはあなたをさそうでしょうが、最後には財産をなにもかも無くさせ、ギャンブルをする人とその回りの人々を滅ぼすのです。

薬物やギャンブルばかりでなく、私たちの心の中に潜む解決されていない問題も私たちに駄目にします。目に見える行為だけではありません。心のうちに優越感や劣等感、怒りやねたみなどが解決されなくて、心の中に積み重ねられていくなら、それらが、いつ、どの瞬間に人を傷つける言葉となり、行いとならないとも限りません。そして、人を傷つけたなら、必ず、自分もそれによって傷つくのです。生きながら死んでいる、身勝手に生きていくように何かに縛られている、そして人を傷つけ、自分を駄目にしていく。そんなガラダの墓場に住む人たちの姿は、現代の私たちの姿を映し出していると言えるのではないのでしょうか？

さて神から遠く離れ、悪霊にとりつかれ、人を傷つけ自分を傷つけているこの人たちを主イエスはどのように救われたのでしょうか。彼らには何の希望もないように見えます。しかし、イエス・キリストは、この人たちのところに近づいて来られました。イエス・キリストはユダヤ人の誰もが、汚れた土地として足を踏み入れなかったガダラの地に、ご自分の方から来てくださったのです。ガダラの町の人たちも恐れ近づこうとしなかった墓場にイエス・キリストは来てくださったのです。ここに、私たちの希望があります。イエス様は「医者が必要とする人は、健康な人ではなく病人です」と言われ「私は失われた者を探して救うために来たのです」ルカ 19:10 とおっしゃいました。キリストは、救いを必要とする人々をいつも心に深く留め、その人の所に来てくださいます。イエス・キリストは救いを必要とする人がどこにいかご存知です。イエスはその人がどこにしようと、その人がいる所まで来てくださいます。ある時、イエスはユダヤ人の誰もが嫌っていたサマリヤの町にわざわざ行かれました。サマリヤの町のひとりの女性が救われるためでした。エリコという町に行かれた時は、その町で一番の嫌われ者ザアカイの家に泊まりました。ザアカイにはイエスの救いが必要だったからです。イエスがザアカイに言われたように、イエスは「失われた人を捜して救うため」に来てくださったのです。

イエス・キリストが「来てくださった」という時、それは、神のもとから来てくださったということの意味します。神の御子であるお方が、私たちに救うために、神と共に持っておられた栄光の一切を、お捨てになって地上に来られたのです。イエスはご自分の持っているものを、求める人々に与えて、与えて、与えつくされ、最後にその命までもお与えになりました。何のために？ 救われる（罪赦される）ためには代価が必要だからです。主イエスご自身が十字架に架かり、ご自身のいのちをもって代価を払って下さいました。私たちすべての罪を背負って、十字架で死んでくださったのです。イエスと共に十字架にかけられた犯罪人のひとりには死のまぎわにイエスを信じましたが、イエスはこの人を天国に導くため、その人のそばに行くために十字架にかかれたと言っても良いでしょう。イエス・キリストは救いを必要とする

人のためには、墓にも、死者の世界にまでも降ってくださったお方なのです。イエスは、今も、救いを必要としている人々のところに来てくださいます。誰であっても、イエス・キリストを素直な心で、心に迎える時、その人に救いが来るのです。私たちのすることはイエスが十字架にかけられたのは自分のための十字架と信じ、受け入れ、感謝することです。

またここでは悪霊につかれた人を救い出すために悪霊自身が自分たちを豚の群れの中に送って下さいと申し出ています。人はイエス・キリストを救い主として受け入れた時に悪霊はその人の内に居続けることは出来ないのです。ですから悪霊など悪いものから自分を守るには主イエスに入っていた方がいいのが一番です。主イエスを信じた時に聖霊が私たちの内に住んでくださいます。イエス様と悪霊が共存するということはありません。平安に過ごしたいと願うなら主イエスを心に受け入れて歩むのが最高の生き方です。ガラダの町の人たちは、イエスが墓場に住む人から悪霊を追い出してくださったのに、そのことをイエスに感謝するどころか、失った豚を惜しみ、イエスを追い返してしまいました。ガラダの人々にとって、悪霊につかれた人々が救われるよりも、豚のほうが大切だったのです。これが人間社会の現実の姿です。しかし、主イエスによって救われ解放されたこの人はイエス様についてゆくと申し出ました。嬉しくて主イエスのために何かさせてもらいたいと思ったのでしょうね。主イエスは私に着いてくるのではなく、町に行って神がどんなに大きなことをしてくださったかを他の人に教えてあげなさいと言われ、この後、この人は多くの人々に話します。キリスト教信仰の特色は救われるために何かをしなければならないのではなく、救われた喜びをもって神のために何かをしたくなるということにあります。世の中の宗教の多くは救われるために何かをしなければならない、何かをすれば救われるかもしれないと強調したり、強制したりします。また中には私こそ救い主などとんでもないことを言い出す人もいます。イエス・キリストによる救いは全くそれとは違います。その違いはどこから来るかと言うなら先ず神は私たちのことを愛しておられるということです。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」イザヤ 43:4 その愛する私たちが罪や悪霊の働きの中で苦しんでいることにがまんがならず自ら十字架の死をもって罪の代価を支払ってくださいました。神様から見ると私たちがキリストの十字架を信じることによって救われる、つまり自分のところに帰ってきてくれたということ。神様にとってそれが最高の喜びなのです。

もし、まだイエス・キリストを心に迎え入れていない方がこの中におられるなら、今朝、謙虚な思いで、あなたのもとに来てくださっているイエス・キリストを心に受け入れませんか。イエス・キリストこそ、私たちを、私たちの本来あるべき姿に戻してくださる、救い主です。イエス・キリストこそ本当の魂の平安を与えてくださるお方です。